

---

---

CROSSROAD-SERIES

# マリア様がみてる

～シューティングスター～

霧野知秋

---



サークル・クロスロード

---

---



# マリア様がみてる

～シューティングスター～

霧野知秋

サークル・クロスロード

# マリア様がみてる

## ～シューティングスター～

### もくじ

#### シューティングスター

新しい季節の始まりに……………	8
尋ねたい、けど……………	52
迷宮攻略……………	78
再会、そして……………	107
シューティングスター……………	126

#### 心の奥の忘れ物

心の奥の忘れ物……………	133
あ と が き……………	172

# シューティングスター

イラスト／ヨコヤマサカズ

## 1

「もうすぐ私たちの出番ですよ。どうしましょう」

ボールを胸に抱いた由美子ちゃんゆみこが、緊張で声を震わせながらつぶやいた。

「大丈夫。口上とかは私がやるから、由美子ちゃんはいつもの練習の通りにやればいいのよ」  
可南子かなこは由美子ちゃんの肩を軽く抱いて、緊張をほぐしてあげる。

（緊張するのも無理ないか）

ステージの袖から客席の様子をうかがうと、今年高等部に入学した新入生たちが、そこにはずらりと並んでいた。みな楽しい高校生活をどこの部活で送ろうか、期待に胸を膨らませて壇上を見上げている。

（私は退屈でたまらなかつたんだけどなあ……）

可南子は自分が新入生だった時のことを思い出し、苦笑いを浮かべる。

周りの全てが敵に見えたあの頃。

今、目の前で行われている、山百合会やまゆりかい主催の新入生歓迎オリエンションなんかは、ひた

すら退屈な時間ではなかった。

そんな自分がこの壇上に立つて、バスケットボール部の紹介をするなんて、二年前にはそんなことは想像すら出来なかつた。

（これもみんな祐巳ゆみさまのおかげ……かしら）

可南子が変わるきっかけを作ったのは先代の紅薔薇ロザキキョウシキさま——福沢祐巳ふざわさま。

でもそんな祐巳ゆみさまも、先月高等部をご卒業なされた。

卒業式の時にいただいたリボンは、今も可南子の髪を括っている。

（祐巳ゆみさまにいただいたものを、今年は私が伝えていきます）

可南子はそのとりボンに手を触れ、心の中で固く誓う。

「可南子さま、可南子さま」

誰かに呼ばれて我に返ると、客席の方から拍手が聞こえてくる。

「次、バスケットボール部の番です」

ステージの袖に立つ放送委員の子が、可南子たちをちらりと見た。

可南子は小さくうなづく。

「はい。バレーボール部のみなさんでした。背を伸ばしたいと思っている人は、バレーボールをやってみるとどうかかな？ では次も背を伸ばした人にお勧め。バスケットボール部のみなさんです！」

「はい、行ってください」

「さ、出番よ。みんな行きましょう！」

「は、はい」

小走りでステージの中央に立つ可南子たち。

司会の子から可南子にマイクが手渡される。可南子がマイクのスイッチを入れると、キューンとハウリングが起こった。

慌ててマイクの方を変えようと、ハウリングが収まる。

可南子はそれを確かめると、客席をぐるっと見回し、「私たち高等部バスケットボール部は、明るく楽しい部活動を目指して日夜練習に頑張っています」と語りかけた。

可南子の言葉に合わせ、由美子ちゃんたちが背後でパス練習を始める。

「もちろん初心者の方でも大歓迎。体育の授業とかで、バスケがあんまり上手く出来なかったと思ってるあなた。ちょっとしたコツでバスケは何倍も、何十倍も楽しくなります。毎週月・木の放課後、高等部の体育館で活動していますので、興味のある人は見に来てください。待ってます！」

一気に話し終えた可南子は頭を下げる。

大きな拍手が可南子たちを包んだ。

「はい。バスケットボール部さん、ありがとうございました。次はハンドボール部さん、よろ

しくお願いします！」

その言葉に送られて、可南子たちはステージを降りる。

途中、放送委員の子にマイクを返すと、彼女は「良かったですよ」と褒めてくれた。

「ありがとう」

可南子は礼を言うのと、部員のみなどと共に講堂の外に出る。

「はあ、緊張したあ」

講堂の外に出たところで、由美子ちゃんが大きなため息をついた。

「由美子ちゃん、パスしてただけじゃないの」

一人が笑いながら突っ込むと、

「そんなことないですよ。私だっけいつボールを客席に落とすか、ヒヤヒヤだったんですから」  
由美子ちゃんはその言うと、ぷうと頬を膨らませた。

「でも、一番緊張したのって可南子さんじゃない？」

隣にいた副部長の梓さんが、そう言うのと可南子を見る。

「えっ、私？」

急に話を振られた可南子は、思わず目を丸くする。

「え、うん。まあ、もう緊張して自分で何言ってるか分かんなくなっただけ……」

「全然そうは見えなかったけどなあ。すんごく落ち着いてて」

梓さんがそう言うのと、他の部員たちも、

「うんうん。さすがキャプテンって感じだったけど」

「薔薇さま方に続いて、下級生の人気が高いのがよく分かるわ」と口々に可南子を褒め称えた。

「そ、そんなことないってば」

可南子の頬が恥ずかしさに紅く染まる。

「今回、新入生に入って貰わないと試合も出来ないんだからね。可南子さんの人気を活かして、頑張りましょう。みんな！」

と梓さんは楯を飛ばした。

バスケットボール部の部員は、可南子を含めてたったの五人。

なんとか一チームは作れるけど、ケガとか病気とか何かがあったら、その段階で試合も出来なくなる。実際、春の都大会は、一人がケガをして出場を見送るしかなかった。

しかも由美子ちゃんを除くと残りは三年生ばかり。だから新入生が入らないと、来年は自動的に休部が待っている。

とは言ったものの――

「実際、どうなのかしら？ 新入生の入る確率は……」

更衣室で着替えながら、可南子はつぶやく。

とりあえず中等部のバスケットボール部に所属していた新入生が三人。けど、彼女たちが高等部でもバスケットを続けてくれるかどうかは、まだ分からない。

となると、後は今年の外部入学生の中にバスケット経験者がいるかどうか？ そして未経験者が興味を持ってくれるかどうかなんだけだ。

「とりあえず中等部の三人には、私が声を掛けるわ」

隣で着替える梓さんがそう言ってくれる。

高等部からリリアンに入った可南子と違い、梓さんは生粋のリリアンっ子。中等部のバスケットにも顔が利く。

初心者大歓迎とは言ったけど、正直なところは経験者の方が嬉しいことには変わりはない。

「あ、私の友達の妹が、今年リリアンに入学したって聞きました。話してみましようか？」

二人の話を聞いた三年生の一人が手を挙げる。

「是非お願いできるかしら」

可南子はそう言うのと、着替えの手を止め、

「他、友達とか知り合いとかで経験者、経験者じゃなくても何か運動をしていた子がいそうだったら、是非誘ってってくれるかしら？」

と全員に告げる。

14 「まずは一人でも多くの人に体育館に来て貰って、練習風景を見て貰うこと。そうすれば、きつ

と興味を持って貰えるはずよ。みんな、頑張りましょう！」

「はい！」

可南子の言葉に、部員たちは大きな声を合わせた。

2

毎週月曜日と木曜日の放課後は、体育館での練習の日。

可南子はユニフォームに着替えると、バスケットシューズの紐を固く結び、靴の中に入れる。

(さてさて、誰か見学の子は着ているかな?)

少しの期待と大きな不安を胸に、体育館の扉を開ける。

でも、そこには見慣れた部員たちの姿しかなかった。

「誰か見学の子は？」

梓さんに尋ねてみると、梓さんは黙って首を横に振った。

「はあ」

可南子が肩を落とすと、

「まあまあ。まだ最初なんだし、後で来るかも知れないよ」

と梓さんが励ましてくれた。

「それもそうね」

あんまり最初から期待が過ぎても仕方がない。

可南子は気持ちを切り替えると、全員を集合させて、練習の開始を宣言した。

それから二〇分後――

「柔軟終わり。それじゃあパス練習行くよー」

「はい！」

その言葉と共に、五人の部員たちは二人と三人と別れ、それぞれ別にパス練習を始めた。

「梓！」

可南子はそう言うと、梓さんにボールを投げる。

練習中は基本的に相手は呼び捨て。

シスターたちは、はしらないと眉をひそめるけど、実際問題、試合の最中にさん付けなんてして余裕はない。

可南子が部長になって最初に取り入れたのがこの名前の呼び捨てだった。

最初は猛反対されたけど、これだけは絶対と言って無理矢理取り入れたのだ。

もちろん練習が終わると元の言葉遣いに戻るのが大前提。コートの中と外はきちんと区別を